

海陽町子どもの読書活動推進計画

(第二次推進計画)



令和3年4月

海陽町教育委員会

はじめに

子どもの読書活動は、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものであります。

海陽町では、子どもの読書活動の推進に関する法律に基づき、平成27年3月に「第1次海陽町子どもの読書活動推進計画」を策定以来、子どもたちが、将来にわたって進んで本に親しみ、本を活用できる資質を養えるよう、家庭・地域・学校・ボランティア等の関係機関と連携して、子どもの読書活動の整備と読書活動の支援に取り組んできました。

第1次計画の策定から5年が経過した今、これまでの成果と課題を検証したうえで、子どもたちを取り巻く社会情勢の変化や子どもたちの読書状況の変化等を視野に入れた読書支援により、子どもたちの読書習慣を育み、読書活動を通じて、生きる力を育むことができるよう「生きる力をはぐくむ読書習慣の育成」を基本目標とした「第2次海陽町子どもの読書活動推進計画」を策定しました。

その目標実現に向けて、本計画では、読書活動を推進するために、

- 1 【意識】(読書の楽しさや読書をすることによって得られるメリットを意識させる)
- 2 【習慣】(朝読や黙読の時間を継続して確保することにより、読書を習慣化させる)
- 3 【環境】(読書環境を整えることにより、読書がしやすい状況をつくりだす)
- 4 【体制】(関係団体が連携をとり支援体制を充実させる)

の【4つの柱】を掲げ、子どもたちが、発達段階に応じた読書機会が得られ、自主的に読書に親しむ習慣が身に付けられるよう、家庭・地域・学校・図書館等関係機関が連携し、子どもの読書活動を推進していきます。

結びに、本計画を策定するにあたり、貴重なご意見やご提言をいただきました海陽町子ども読書推進計画策定委員の皆様にご心から感謝申し上げます。また、本計画を実現するために、今後も町民の皆様の支援・ご協力をお願い申し上げます。

令和3年3月

海陽町教育委員会

教育長 三浦 良

目 次

第1章 海陽町子どもの読書活動推進計画の策定にあたって	1
1 計画策定の背景	1
2 第一次推進計画の成果と課題	1
(1) ブックスタート事業	1
(2) 幼稚園・保育所における取組	2
(3) 学校における取組	2
(4) 町立図書館における取組	2
3 第二次計画の基本理念	4
4 計画の基本目標と推進の柱	4
(1) 基本目標 【生きる力をはぐくむ読書習慣の育成】	4
(2) 読書活動を推進させるための四つの柱	5
5 計画の期間	5
6 計画の対象	5
第2章 子どもの読書活動を推進するための具体的な取組	6
1 家庭・地域における子どもの読書活動の推進	6
(1) 家庭・地域の役割	6
(2) 具体的な取組	6
2 保育所・幼稚園における子どもの読書活動の推進	6
(1) 保育所・幼稚園の基本方針	6
(2) 具体的な推進事項	7
3 学校における子どもの読書活動の推進	7
(1) 学校の基本方針	7
(2) 具体的な推進事項	7
4 町立図書館における子どもの読書活動の推進	8
(1) 町立図書館の基本方針	8
(2) 具体的な推進事項	8
第3章 子どもの読書活動を支えるための支援体制	11
1 支援体制の組織化と推進	11
2 読み聞かせボランティアの支援と人材育成	11
3 家庭・地域における読書活動推進	12
第4章 三館学協働による事業を通じた読書活動の推進	12
1 三館学協働による読書活動の推進	12
2 具体的な取組	12
参考資料: 読書活動についてのアンケート調査結果	14

第1章 海陽町子どもの読書活動推進計画の策定にあたって

1 計画策定の背景

様々な要因による近年の子どもの活字離れ、読書離れという憂慮すべき事態を受け、国は、平成13年12月に「子どもの読書活動推進に関する法律」を施行しました。この法律は、子どもの読書活動の推進に関し、基本理念、並びに推進に関する必要な事項を定めています。

また、これを受けて平成14年8月に「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」が、20年3月には第二次基本計画が、25年5月には第三次基本計画が、そして、30年4月には第四次基本計画が順次策定されました。計画の中では「すべての子どもが豊かな心をはぐくみ、生涯にわたり自ら学ぶことのできる力を養う」という共通理念のもと読書環境の整備や社会的気運の醸成に努めてきました。

徳島県では、国の基本計画に基づいて、平成15年11月に第一次推進計画が策定されました。その後、概ね5年ごとに二次計画、三次計画、四次計画と順次計画を進めてきました。計画を進めるにあたっては、前計画の成果や課題、社会情勢の変化等を踏まえた上で、次の計画が生きたものとなるよう考慮されています。計画が進むにしたがって、読書環境の整備のみならず、家庭、地域、学校、図書館、ボランティア団体等における読書推進の取組、諸情勢の変化に対応した取組など様々な取組が行われるようになってきています。

本町においては、「子どもの読書活動の推進に関する法律」に基づき、平成27年3月に「第一次海陽町子どもの読書活動推進計画」を策定しました。この計画は、本町の子どもたちが、将来にわたって進んで本に親しみ、本を活用できる資質を養うことを目的に、基本的な方針と具体的な方策を示し、5か年を推進期間として進めてきました。

今回、第二次推進計画を策定するにあたり、アンケートを実施するとともに第一次推進計画の成果や課題について検証を行いました。これをもとに、実態に即した実りのある推進計画を策定し、子どもたちの読書活動推進に取り組んでいきます。

2 第一次推進計画の成果と課題

(1) ブックスタート事業

平成27年より、保健環境課(現:福祉人権課)と連携してブックスタート事業を開始しました。絵本を通じた親子のふれあいのみならず、親同士の交流やおはなし会との同時開催など広がりを見せてきています。ブックスタートからおはなし会へどうつなげるか、保育所・幼稚園へどうつなげるかなど、発達段階に応じた支援の仕方を具現化していくことが求められます。



ブックスタート

(2) 幼稚園・保育所における取組

子どもの発達・年齢に応じて毎日絵本の読み聞かせを行ってきました。1対1での読み聞かせ、グループでの読み聞かせなど、子どもたちがどのようにしたら本に親しめるかを考えて取り組んできました。月2回の移動図書館の利用も読書推進に役立てています。

保護者の意識に関するアンケートでは、9割以上の方が「読み聞かせは大切だ」と回答しています。しかしながら、様々な事情で読み聞かせの時間が十分確保できていないのが現状です。読み聞かせの時間をどのように確保してもらうか、またどう支援していくかが今後の課題です。大人の肉声で、肌の温かさが感じられる読み聞かせの実現を目指します。

(3) 学校における取組

小学校においては、朝読や業間読書のほか、読書記録の活用、多読賞の表彰などいろいろな工夫をして取り組んできました。また、読み聞かせボランティアや図書館との連携も読書推進に大きな役割を果たしています。

図書館資料の小学生一人当たり年間貸出冊数を見ると、平成27年度は65冊でした。令和元年度になると75冊へと10冊の増加が見られます。また、全国学力調査における本町のデータでは、1日に30分以上読書をしている子の割合は、平成28年度には26%でしたが、令和元年度には40.4%へと増加しています。

今後の課題として、家庭での読書の活性化、図書室資料の充実、環境整備をどのように行うかということがあげられます。

中・高等学校においては、毎月読書週間を設けるなどして読書が習慣化する取組を行ってきました。また、ビブリオバトルの開催や、図書室に漫画本を揃えるなど、読書意欲の喚起にも努めてきました。しかしながら不読率は中学校で26%、高校で30%となっています。ネットなどの動画を見る時間が長い、図書室の利用が少ない、蔵書が古い、貸出冊数が減少しているなど、読書離れを示す要素も多く見られます。

様々な情報機器が生活や学習の場で使われるようになった現在、時間の有効活用を踏まえた上で、読書のメリットをいかに伝え、読書しやすい環境をどのように作り出していくかがこれからの課題です。

(4) 町立図書館における取組

①おはなし会の開催

毎月1回、2つの図書館で読み聞かせボランティアによるおはなし会を開催しています。幼児から小学生を対象に、季節に応じた絵本の読み聞かせが行われています。紙芝居やパネルシアター、エプロンシアターなどプログラムも多彩になってきています。他のイベントと重なることなどで、小学生の参加



おはなし会

者が少なくなっている傾向があります。

②移動図書館による貸出

町内の保育所、幼稚園、小学校を図書館車で巡回することにより、幼児や小学生への貸出サービスを行っています。小学校では、教職員の指導により一人当たりの年間貸出冊数は100冊を超えることが多くなってきました。



移動図書館車での貸出

移動図書館 貸 出 数 (小学校)					
	27年度	28年度	29年度	30年度	元年度
一人当貸出数	103冊	89冊	106冊	101冊	91冊
貸出冊数	15,445冊	12,823冊	13,516冊	13,796冊	11,948冊

③業間貸出

図書館に隣接する海南小学校へは業間貸出を行っています。2週間に1度、図書館内で各学年へ本の貸出が行われます。一人当たりの貸出冊数は年々増加しています。

業 間 貸 出 数					
	27年度	28年度	29年度	30年度	元年度
一人当貸出数	39冊	51冊	59冊	60冊	63冊
貸出冊数	8,845冊	9,880冊	11,176冊	10,604冊	10,083冊

④学校への学習支援

学校が図書館を気軽に活用できる体制をつくることで、学習に役立つ資料の提供をスムーズに行えるように取り組んでいます。図書館ネットワークの利用について、教職員への周知が不十分なところがあるのでPRを強化していく必要があります。

⑤行事を通じた啓発

夏休みの植物採集名付けの会や工作教室など子ども対象の行事を行うことにより、図書館に親しんでもらうとともに、進んで図鑑を活用したり、関連する図書を活用したりする意欲づくりに努めてきましたが、子どもたちの植物離れ、昆虫離れが進み、参加者が減少しています。学校や民間団体との連携が望まれます。

⑥三館学協働による取組

文化村祭りにおいては、図書館、博物館、文化館が協力して毎年イベントを開催しています。移動図書館での本の貸出、ブックスタートでの絵本の展示などを通して、読書活動推進に努めています。

図書館と文化館協働の植物採集教室では、小学生を対象に、親子で植物採集をする体験を通して、自然に触れ合い植物に興味を持てるよう計画、実施しました。また、図書館と博物館で鉄道に関するリレー展示を行うなど、両館を気軽に利用してもらえるような企画も行いました。今後も、地域の自然・歴史・文化などに関する様々な協働事業を考え、進めていきます。

3 第二次計画の基本理念

子どもの読書活動は、言語能力、感性、表現力、想像力など人生をより豊かにするために必要な力を育みます。そして、子ども時代に培った読書習慣は、自己実現だけでなく、多様な文化を理解したり社会をよりよくしたりする力にもつながっていきます。そのため、小さい時から本に親しみ、進んで本を読む習慣を身につけさせることが重要になってきます。

近年、社会構造や環境は大きく変化し、予測しがたくなってきています。子どもたちを取り巻く情報環境においても、スマホをはじめとする情報メディアが生活の中に浸透し、それにとまって活字離れや読書離れが一層進んでいます。海陽町においても、アンケート結果を見ると、子どもたちの多くがスマホやゲームなどを使用しており、それに反して読書時間が減少しているのは確かです。このような状況の中で、情報の意味を判断したり、文章の内容を読み解いていったりする力が十分育っていないのではないかということが危惧されます。

第二次計画では、現状を踏まえ、子どもたちの発達段階に応じた対策、実態に応じた対策を講じていく必要があります。学校をはじめ、各団体においては、それぞれの実情に則した読書活動推進の方策を実施していくこととします。また、支援体制や連携体制についても一次計画の反省を踏まえ、一層充実した体制の整備を行っていきます。

なお、計画を進めるに当たっては、各団体の実情に即した実践や情勢の変化に柔軟に対応できるようにするため、従来の PDCA サイクルに限定することなく、OODA ループや PDR サイクルの視点も取り入れて運用します。

※PDCA サイクルとは Plan(計画)、Do(実行)、Check(評価)、Action(改善)のサイクルで生産を向上させる手法。

OODA ループとは、Observe(観察)、Orient(方向性の決定)、Decision(判断)、Act(行動)を繰り返して成果を上げていく手法。

PDR サイクル、とは Prep(準備) Do(行動) Review(評価)の三段階で仮説検証を行う手法。

4 計画の基本目標と推進の柱

(1) 基本目標 【生きる力をはぐくむ読書習慣の育成】

海陽町では、平成 27 年に第一次計画を策定し、読書活動の推進に取り組んできました。第二次計画では、この計画をさらに発展させ、より具体的な方策を盛り込むことで更なる活性化を図ります。

第二次計画の基本目標として「生きる力をはぐくむ読書習慣の育成」を掲げました。小さい時から読書に親しみ、読書の良さを知ることは、生涯にわたって読書を生活に生かし、生きる力に結びつけることができると考えます。

具体的な推進の軸として、四つの柱を設定しました。

(2) 読書活動を推進させるための四つの柱

【意識】(読書の楽しさや読書をすることによって得られるメリットを意識させる)

読書に対する関心を高めるとともに、本を読むことでどのようなメリットがあるのか、また、読み聞かせを行うことでどのような能力が養えるのか、など、子どもたちと保護者、大人に対して子どもの読書活動に対する理解を深めてもらう。

【習慣】(朝読や黙読の時間を継続して確保することにより、読書を習慣化させる)

短時間でもよいので毎日読書をする習慣を身につける。読書習慣を身につけることで読む力と生涯学習力を育てる。

【環境】(読書環境を整えることにより、読書がしやすい状況を作り出す)

必要とする資料の提供や読書がしやすい施設づくり、また、希望する本がすぐに手に入るシステムの充実など、読書環境を整備することは読書活動を推進するための基本的な条件である。支援を必要とする子どもたちをはじめ、全ての子どもが読書しやすい環境を作り出すことに重点を置く。

【体制】(関係団体が連携をとり支援体制を充実させる)

読書活動を推進する人材の育成、組織・ネットワークづくり、広報・啓発など支援体制の整備を行うとともに、各団体相互の連携を強める。

5 計画の期間

この計画は、令和3年度から7年度までの5か年とし、必要に応じて見直しをします。

6 計画の対象

0歳からおおむね18歳以下のすべての子どもを対象とします。

第2章 子どもの読書活動を推進するための具体的な取組

1 家庭・地域における子どもの読書活動の推進

(1) 家庭・地域の役割

本に親しみ、進んで本を読む子を育てる基盤を作るのは家庭や地域です。特に、乳幼児期からの家庭における取組は、子どもの読書習慣形成に大きな影響を及ぼします。小さいころから、家庭での読み聞かせを通して味わった保護者のスキンシップや愛情は、読書志向だけでなく、家族の絆や自己肯定感の形成にも大いに役立つものと考えられます。

子どもたちに読書習慣を自然に身に着けさせるためには、保護者や周囲の大人が進んで読書するとともに、読書環境を整え、読書の楽しさを伝えていく姿勢が求められます。

また、地域においても、公民館や子ども館、図書館などでの絵本の読み聞かせや行事などを通じて、子どもたちが本に親しめる機会が増えるよう取り組んでいきます。

(2) 具体的な取組

①ブックスタート事業の推進

春と秋、年2回のブックスタート事業を継続して行っていきます。0歳から始める絵本の読み聞かせの大切さをブックスタートで保護者に伝えていきます。

②家読・ノーテレビデー・ノーゲームデーの実施

所・園・学校を中心に、家読、ノーテレビデー、ノーゲームデーが定期的に実施できるよう取り組みます。

③おはなし会の実施

ボランティア団体が中心となり、幼児から小学生を対象に図書館において毎月おはなし会を実施します。子ども館やファミリーサポートセンターとも連携したおはなし会も増やしていきます。また、文化祭等での郷土民話の紹介なども行っていきます。

④町ライブラリーの充実

町ライブラリーに絵本や児童書などを設置し、気軽に本と触れ合える環境を整えます。

2 保育所・幼稚園における子どもの読書活動の推進

(1) 保育所・幼稚園の基本方針

幼児期に大人が語り掛ける言葉の質と量は、子どもたちがことばの力を獲得するうえで大きく関係しています。今、子どもたちの耳にどのような言葉が入っているか考えたとき、動画やテレビ、ゲームのような機械から一方的に流れてくる言葉が多くなり、生身の大人の語り掛ける「生きたことば」が著しく減っています。保育所や幼稚園において、子どもたちに絵本の読み聞

かせをし、語り掛けをすることは子どもたちの脳の健全な発達を促し、ことばの力を育てます。

また、環境の整備や移動図書館車の活用など読書活動を推進するための有効な方法を進んで取り入れます。保護者に対しても、読み聞かせや家読の大切さを知らせ、所・園と家庭が一体となって読書活動推進に取り組んでいきます。

(2) 具体的な推進事項

- ①絵本の読み聞かせを通して、様々なことに興味や関心を持ち、豊かな心情や感性を育む共に、生命の大切さを伝えられるようにしていきます。
- ②読み聞かせを継続するとともに、作者の意図が伝わるような絵本や紙芝居が提供できるようにしていきます。
- ③絵本の読み聞かせの大切さや絵本についての情報を保護者と共有していきます。
- ④日常の生活の中にいつも絵本があるように読書環境の改善を行います。
- ⑤読書に関する職員研修を行うことで、子どもの読書状況の改善につなげます。
- ⑥図書館と連携を取り、移動図書館車の有効な活用を進めます。

3 学校における子どもの読書活動の推進

(1) 学校の基本方針

小学校の低学年から年齢を経るにしたがって、テレビやゲーム、インターネット、ケータイなどの情報機器に触れる機会が多くなり、中学生では 56%、高校生では 46%の子どもたちが 1日に 2 時間以上動画を見ているという現状(令和 2 年度海陽町読書活動に関するアンケート結果より)があります。このようなことから考えても、読書離れや活字離れがこれからますます進むことが心配されます。

読書によって得られる情報は、子どもたちの言語能力、感性、思考力、創造力など高め、自己を形成する力や生きる力につながるのは確かです。子どもたちが、読書することで得られるメリットを認識し、継続して楽しんで読書ができる習慣を学校時代に身につけることができるよう、発達段階に応じた支援を行っていきます。

(2) 具体的な推進事項

- ①朝の読書や校内一斉読書など、静かに本を読む時間を設け、継続して本を読む習慣が身につくようにします。
- ②各学年で読書の目標値を決め取り組みます。
- ③支援の必要な子に対する配慮を十分に行い、全ての子が読書しやすい環境を整えます。

- ④読書記録をつけることにより、読書に対する意欲を高めます。
- ⑤図書委員会が中心になって読書を推進する活動を行います。
- ⑥読書週間や読書デーを設定し、家庭や地域での読書の活性化を図ります。
- ⑦学校図書館の充実を図り、児童生徒の多様なニーズに対応できる読書環境を整えます。
- ⑧読書活動に関する職員研修を行うことで、子どもの読書状況の改善につなげます。
- ⑨移動図書館や団体貸出の活用など図書館と連携し、読書活動を推進します。
- ⑩ボランティア団体と連携し、朝の読み聞かせの充実に努めます。



図書館キャラクターコンテスト
(穴喰小)

4 町立図書館における子どもの読書活動の推進

(1) 町立図書館の基本方針

町立図書館は「いつでも・どこでも・だれでも」をモットーに、町民が気軽に本を利用できる施設です。特に子どもたちの読書活動を支援していく上で図書館は中心的な役割を果たさなければなりません。0歳児から高校生まで、ニーズに応じた本を効果的に提供していくことが求められます。そのためには、所・園・学校・諸団体との連携を密にし、読書活動の推進を図っていきます。

(2) 具体的な推進事項

①ブックスタートの実施

平成27年度からスタートしたブックスタートですが、ボランティアの協力により0歳児への絵本の提供が円滑に行えるようになりました。今後もこの事業を継続していくことで、絵本を通じた親子のふれあいの大切さ、読み聞かせの大切さを啓発していきます。

②おはなし会の実施

乳幼児から小学生を対象に、読み聞かせボランティアによるおはなし会を毎月実施し、絵本や紙芝居、童謡の楽しさを伝えていきます。また、ファミリーサポートセンターや放課後子ども教室と連携したおはなし会も開催していきます。

③三館学協働事業の実施

植物採集教室や郷土史学習会など、図書館、博物館、文化館が連携してできる行事を企画し、図鑑や郷土資料に興味を持てるようにします。

④移動図書館による貸出

町内の保育所・幼稚園・小学校と連携し、移動図書館車での幼児や小学生への貸出を進めます。また、教職員のニーズにも対応できる体制を整えます。

⑤小学校への休み時間の貸出

図書館に隣接している海南小学校の児童に対して、各学年 2 週間に一度、業間の時間を利用した貸出を行っていきます。

⑥学校図書館への支援

各学校の図書室の蔵書管理がスムーズに運営されるよう図書室のシステム化を支援していきます。同時に団体貸出も促進していきます。

⑦学校の学習支援

学校が図書館を気軽に活用できる体制を作るとともに、ニーズに応じた資料の提供がスムーズに行えるようにします。

⑧学校とのネットワークづくり

学校にある学習用タブレットを使って図書館の資料検索ができるようにするとともに、電子書籍の利用もできるよう整備します。

⑨ヤングアダルトコーナーの充実

中学生や高校生が興味を持っている資料を充実させるとともに、特設コーナー等を使って幅広い読書ができる場を提供します。

⑩特設コーナーの設置

読書感想文の課題図書の展示、時節に応じた資料の展示などを行うことにより、新しい情報や必要な情報が手に入りやすい環境をつくれます。

⑪展示コーナーの設置

小学生・中学生・高校生の絵画・書道作品などを展示することにより、図書館が身近なものとして感じられるようにします。

⑫行事を通じた啓発

植物採集教室、工作教室などを行うことにより、図鑑やものづくりの資料に興味を持ち活用できる環境を整えます。

⑬蔵書の整備・充実

アンケートをもとにリクエストの多い本を揃えるとともに、質と量の面から絵本と児童書の充実を図ります。

⑭ハード面の環境整備

図書館の施設・設備を整備することは、アクセシビリティを高める上でなくてはならないことです。特に、システムを利用しやすいものに改善していくことで読書活動の推進につながります。

⑮ホームページ・広報の活用

図書館ホームページや毎月発行される広報に子どもの読書活動に関する情報を掲載し、読書活動に対する意欲を高めます。

⑯図書館職員の研修

職員研修を実施し、子どもの読書活動に対する理解を深めるとともに、学校図書室のシステム化や広報の活性化を図ります。

⑰読み聞かせの質の向上

読み聞かせの研修会を開き、選書の仕方や読み方を学ぶ機会を作ることで読み聞かせの質を向上させます。



保育所への貸出



読書感想画展

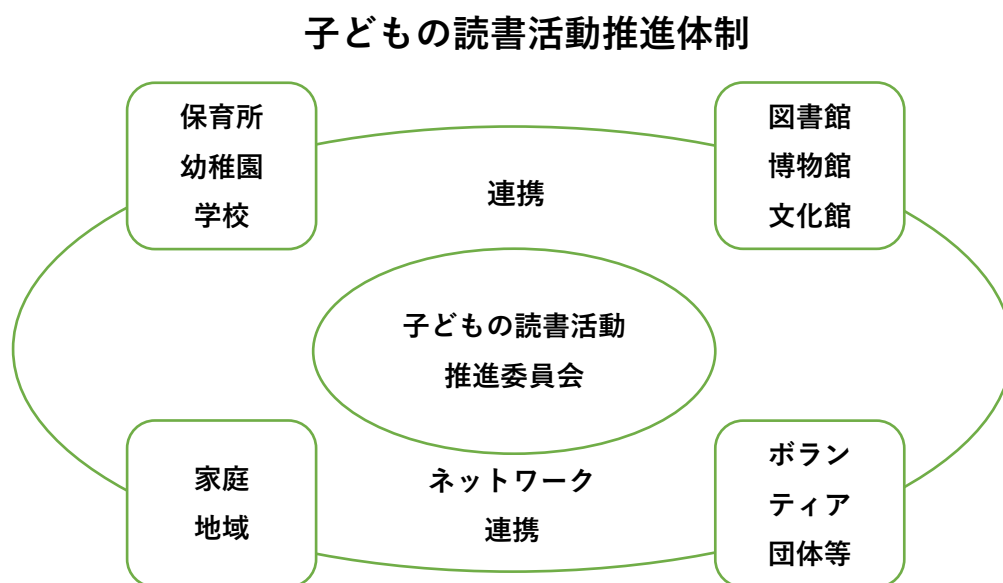


植物採集名付けの会



夏休み工作教室

第3章 子どもの読書活動を支えるための支援体制



海陽町では、令和3年に第3期教育振興計画を策定しました。この計画の中で、基本方針として「たくましく社会を生き抜く力を育てる学校教育の充実」「地域と共創する教育力の向上」「学びあい町と人をつくる生涯学習の充実」等、読書活動が方針達成の素地となる項目が取り上げられています。

これらのことを具現化する手立ての一つとして子どもの読書活動推進計画を位置づけます。読書活動推進計画の進行管理を行う中核には子どもの読書活動推進委員会を置きます。推進委員会を定期的に開催する中で、図書館、所・園・学校、博物館、ボランティア団体などが連携を密にし、互いに協力し合いながら読書活動の推進を図っていきます。

1 支援体制の組織化と推進

読書活動を持続的に推進していくにあたって、第一次計画で十分機能しなかった支援体制を見直し強化していきます。推進委員会を中心に、PDCA サイクルのみならず、OODA ループや PDR サイクルなども柔軟に取り入れ進めていきます。

2 読み聞かせボランティアの支援と人材育成

学校や地域で活動する読み聞かせボランティア団体は、子どもの読書活動を推進する上で大変大きな役割を担っています。ボランティアの人たちを支えていくためには、活動に対する助成、場の提供、広報活動などが必要です。それに加えて、新たな人材の育成や研修会の開催などにも力を入れていきます。



読み聞かせボランティア研修会

3 家庭・地域における読書活動推進

家庭・地域における読書活動の推進については、公民館、地域子育て支援センター、ファミリーサポートセンター、放課後子ども教室などを利用する保護者に対して、読み聞かせや読書の大切さを啓発していきます。また、読書と関連する事業やイベントを通じて、生涯学習の振興につなげます。

第4章 三館学協働による事業を通じた読書活動の推進

1 三館学協働による読書活動の推進

三館とは、図書館、博物館、文化館であり、学とは、所・園・学校を指します。これらすべてが連携し、事業を通じて読書活動の推進に努めます。また、事業を進めることで、学校教育と生涯学習の融合を図ります。子どもたちが地域の歴史・文化・自然の魅力に触れることで、地域に誇りを感じ、地域を愛する芽が育まれます。そして、そこから活力を持って生活しようとする力も生まれてきます。また、地域資料や地域教材、図鑑等を積極的に利用することで、様々な資料を有効に活用する力も養うことができると考えます。

2 具体的な取組

図書館、博物館、文化館のイベント、土曜学習などを通じて、子どもたちが楽しく過ごせる場、郷土の歴史にふれる場、地域の自然にふれる場づくりを行います。

また、学校教育における社会科学習、理科学習、総合的な学習などに関連させ、地域の歴史文化・自然を学習させる事業を行います。その際、図書館や博物館の地域資料・歴史資料、各種図鑑等を積極的に活用できるよう取り組んでいきます。

各館の企画展、講演会なども活用し、地域資料や歴史資料、図鑑等に関心を持ち、理解を深めることができる環境づくりにも努めます。

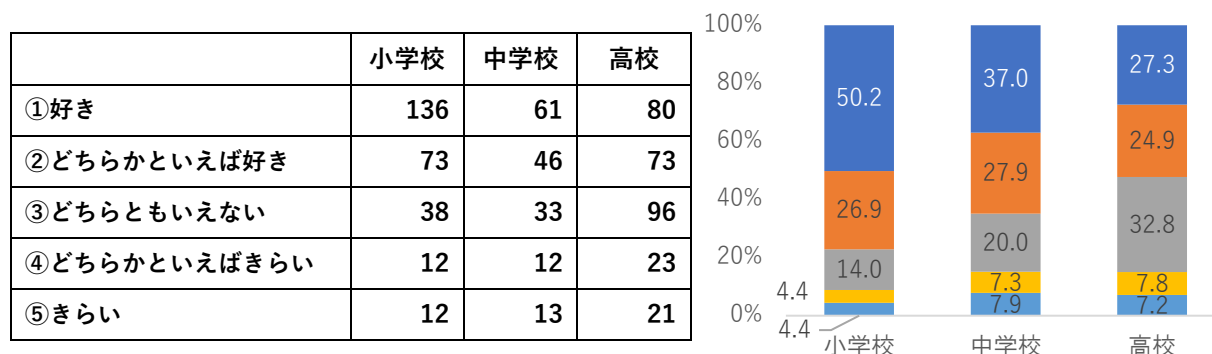
参考資料: 読書活動についてのアンケート調査結果

町内にある小学校3校、中学校2校、高等学校1校の全ての児童・生徒、保育所(園)4園、幼稚園1園の全ての保護者へ令和2年9月末に紙でのアンケートを実施しました。児童・生徒用と保護者用でアンケートの質問内容は異なります。

	対象数(人)	回答数(人)	回収率(%)
保護者	191	161	84.3
小学校	272	271	99.6
中学校	175	165	94.3
高校	300	293	97.7

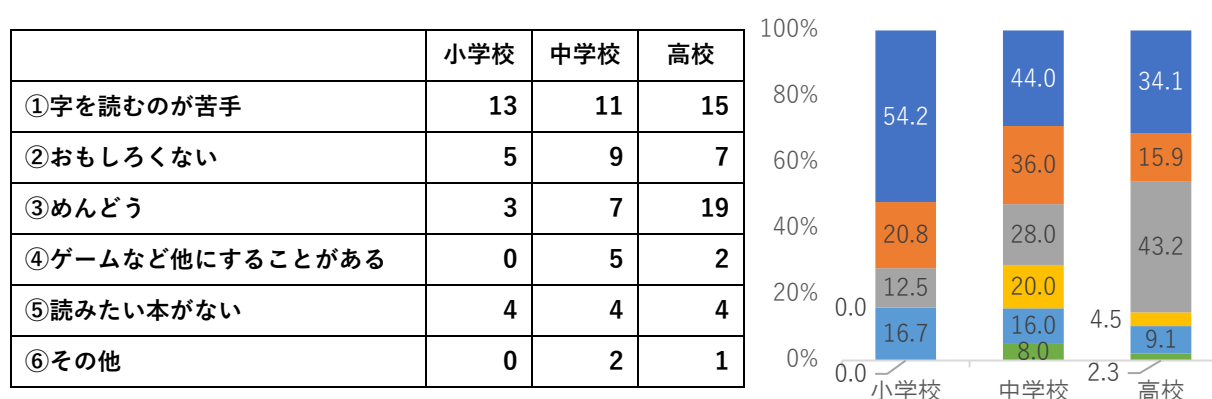
小学校・中学校・高校

質問1: 本を読むことが好きですか。



「好き」「どちらかといえば好き」と答えた人の割合は、小学校:76.8%、中学校:61.1%、高校:51%でした。調査対象、質問が若干異なりますが、H30年度に文部科学省が行った委託調査では小学生で73.3%、中学生で67.3%、高校生で62.9%となっており、小学生を除き全国よりも低い数値です。特に高校生では全国よりも10%ほど低くなっています。

質問2: 読むのが「どちらかといえばきらい」「きらい」という人は、なぜですか。

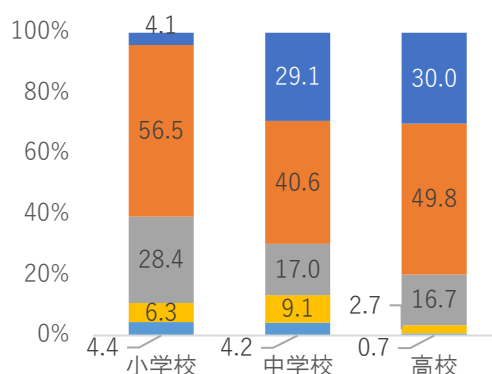


※この質問は選択肢を1つ選ぶ形式でしたが、複数回答分も含めてグラフにしています。そのため「どちらかといえばきれい」「きれい」と答えた人の数よりも多くなっています。

質問1で「どちらかといえばきれい」「きれい」を選択した児童・生徒へ理由を尋ねたところ、「字を読むのが苦手」と答えた人が小・中・高で多数見られる結果となりました。高校では「字を読むのが苦手」よりも「めんどろ」という回答が1番になっています。

質問3:1日のうちでどのくらいの時間、本を読んだり読んでもらったりしますか。
(中学校・高校は1日のうち平均どのくらいの時間読みますか。)

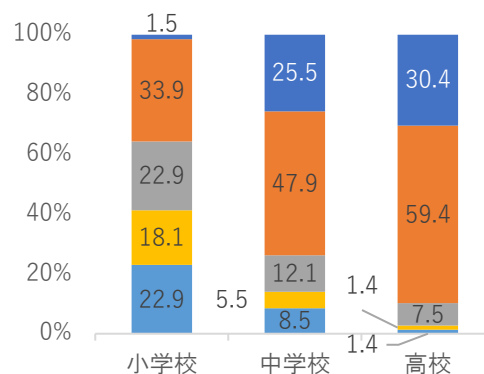
	小学校	中学校	高校
①0分	11	48	88
②30分未満	153	67	146
③30分～1時間未満	77	28	49
④1時間～1時間30分未満	17	15	8
⑤1時間30分以上	12	7	2



傾向として年齢が上がるにつれて、読書時間が「0分」の人が増加しています。中学校、高校と上がるにつれて、課題の量やほかにすること(部活や塾など)が増えることで、読書時間が削られるといった事情もあります。

質問4:1か月のうち何冊ぐらい本を読みますか。

	小学校	中学校	高校
①0冊	4	42	89
②小1～5冊 中高1～3冊	92	79	174
③小6～10冊 中高4～5冊	62	20	22
④小11～20冊 中高6～10冊	49	9	4
⑤小21冊以上 中高11冊以上	62	14	4

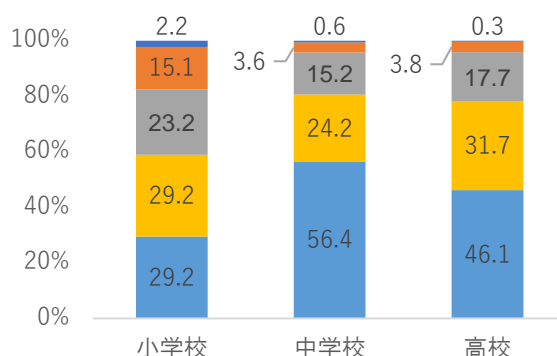


※この質問では、年齢が上がるとともに文字数の多い本へ変化することで、同じ時間で読むことのできる冊数が少なくなる事情を考慮し、小学校と中学校・高校で選択肢を一部変えています。

小学校では1～5冊の回答が1番多くなっていますが、月に11冊以上読む児童も多く見られました。中学校・高校では0冊の回答が小学校よりも増え、月に1～3冊の回答が1番多くなっています。特に高校では5冊を越えて読む人がかなり少ないことが分かります。読むスピードの個人差を考慮する必要がありますが、年齢が上がるにつれて、読む冊数が少なくなる傾向があります。

質問5:テレビ・スマホ・ゲームなど、動画の画面を見る時間は1日にどれくらいですか。

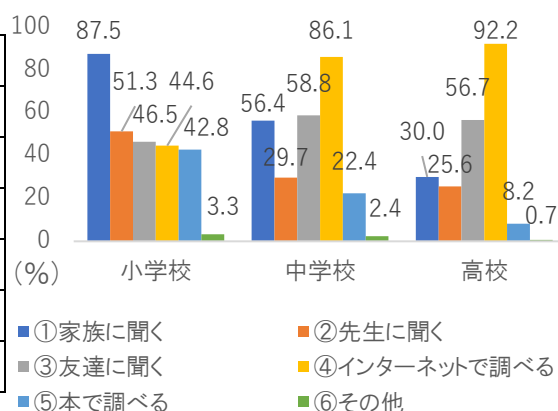
	小学校	中学校	高校
①見ない	6	1	1
②30分未満	41	6	11
③30分～1時間未満	63	25	52
④1時間～2時間未満	79	40	93
⑤2時間以上	79	93	135



小・中・高とも1時間以上動画を見る児童・生徒の割合が多くなっています。動画を見る時間の増加が、読書時間を減少させることに繋がっていると一概には言えませんが読書時間の減少は好ましくないため、時間の有効活用で読書時間を作り出していくことが望まれます。

質問6:わからないこと、知りたいことがあったとき、どのような方法で調べますか。(複数回答可)

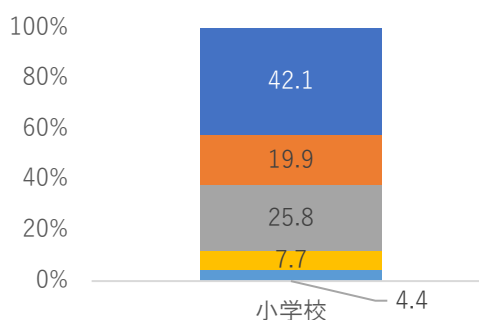
	小学校	中学校	高校
①家族に聞く	237	93	88
②先生に聞く	139	49	75
③友達に聞く	126	97	166
④インターネットで調べる	121	142	270
⑤本で調べる	116	37	24
⑥その他	9	4	2



調べ物があるとき、小学校ではほとんどの児童が家族に聞きます。中学校、高校になるとほとんどがインターネットを活用しています。本で調べることは小・中・高ともに半分以下の割合となっています。

小学校のみ:本を読んでもらうのは好きですか。

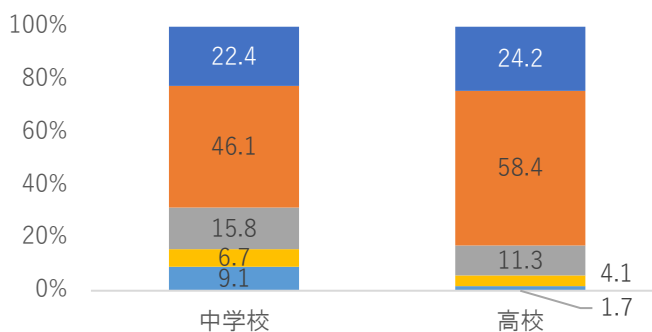
	小学校
①好き	114
②どちらかといえば好き	54
③どちらともいえない	70
④どちらかといえばきらい	21
⑤きらい	12



小学校のみに聞きました。読み聞かせを「好き」「どちらかといえば好き」と答えた児童は62%でした。字を読むことが苦手でも読み聞かせは好きと答えている児童もいました。

中学校・高校のみ:1年間に何回ぐらい図書館に行きますか。

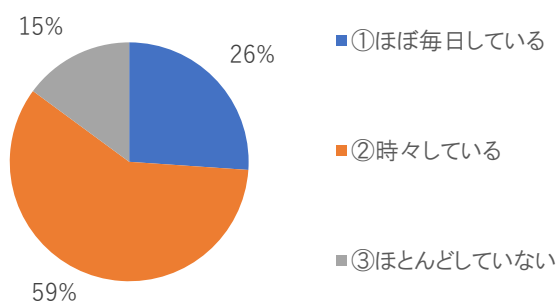
	中学校	高校
①0回	37	71
②1~5回	76	171
③6~10回	26	33
④11~20回	11	12
⑤21回以上	15	5



中学校・高校のみに聞きました。中学校では 77.7%、高校では 75.5%の生徒が1年に1回以上図書館を利用しています。

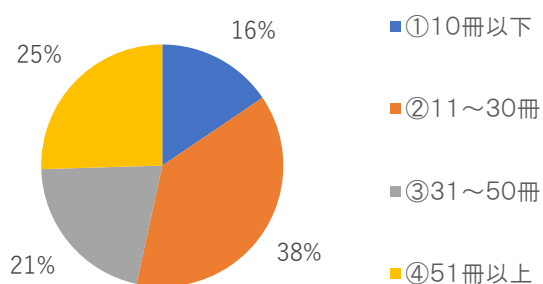
保護者(※1.の質問については子どもの年齢を聞くもののため省略しています。)

質問2. お子さんに読み聞かせをしていますか。



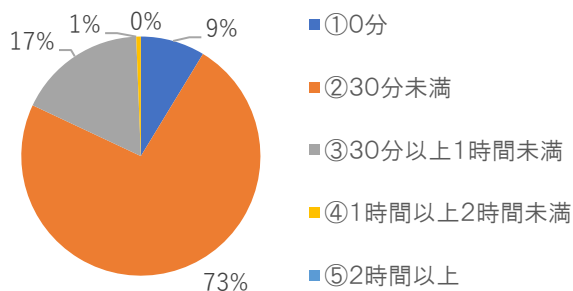
ほとんどの保護者が子どもへの読み聞かせをしています。1人で本を読むことのできない子どもにとって読み聞かせは物語に触れる貴重な機会です。

質問3. 自宅に子どもの本はどのくらいありますか。(図書館で借りている本も含む。)



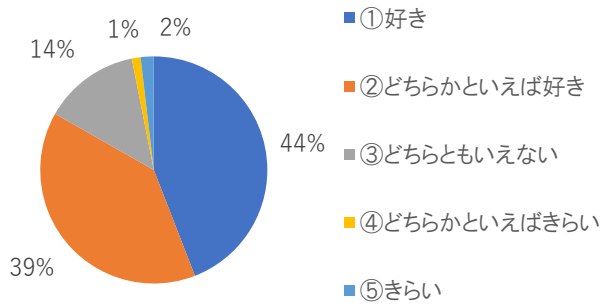
自宅にある子どもの本の冊数には、ばらつきがあるようです。自宅に置くことのできる冊数には限りがあるため、図書館がその分を補えるようになることが望ましいです。

質問4. お子さんは1日のうちでどのくらいの時間読み聞かせをしてもらったり、自分で読んだりしますか。



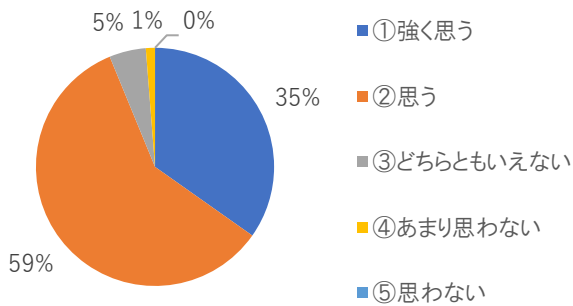
ほとんどの家庭が30分未満で、長くとも1時間程度の読み聞かせの時間でした。読書の習慣をつけるためにも大切な時間となっています。

質問5. お子さんは本が好きですか。



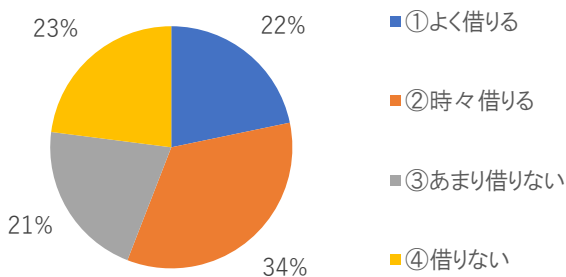
「好き」「どちらかといえば好き」の回答は83%です。子どもの年齢によって、「どちらともいえない」の回答もありました。

質問6. 読み聞かせは大切だと思いますか。



読み聞かせは、読書習慣を付ける、親子のコミュニケーションの1つ、物語に触れる時間として大切なものです。調査ではほとんどの家庭で読み聞かせが大切であると考えられています。

質問7. 図書館で借りた本は、よく借りる、時々借りる、あまり借りない、借りない、どれくらい借りますか。



図書館での貸出について、「よく借りる」「時々借りる」と「あまり借りない」「借りない」が半数程度の割合となっています。図書館をもっと利用してもらうことが望まれます。